

コラム

「中東の 3E 問題～サウジアラビア・カタール出張を通じて～」

計量分析ユニット 需要分析・予測グループ

(兼) 戦略産業ユニット 国際動向・戦略分析グループ 惣福脇 学

数年前、私の友人がシリア人の男性と結婚し、イスラム教に改宗した。身近な知り合いがイスラム教という、私とは縁遠い宗教に改宗したという事実は私にとってそれなりのインパクトをもち、それ以来なんとなく中東に関して興味をもっていた。といっても、彼女とご飯を食べる時は豚や魚（タコ、イカ、ウナギなどの鱗のない魚）などが食べられず、お店では調味料や材料まで確認しなければならないため、日本でおいしい食べ物が食べづらくなって大変だなあという、呑気な認識しか持ちあわせていなかったのであるが。

さて、そんな中東に深い関心まではもっていなかった私だが、今年の 3、6 月にカタールとサウジアラビアに仕事で行く機会を得た。本稿では中東について、現地で見聞きし感じたことなどに触れながら、エネルギー問題を語る上で欠かせない 3E(Economy, Energy Security, Environment)の視点を通して語ることに試みたいと思う。

まず、Economy である。実は中東諸国は 2000 年以降 GDP 成長率が年平均 5%程度と、かなり高い。カタールにおいては 2 桁成長を続けており、リーマンショックの起きた 2008 年でさえ 15.8%という世界で 1 番高い GDP 成長率を誇っている。この高成長を支えている理由は、石油価格の高騰である。特に中東産油国が抱える問題の一つは豊富に採れる石油資源からの収入に頼りきっているという点である。サウジアラビアやカタール、UAE（アブダビ）などの石油資源で潤っている国家の歳入のうち約 8 割は石油収入である。しかし、石油は市場で取引されるため価格が不安定であり、国家歳入の増減は健全な国家運営に支障をきたす不安がある。

次に、石油産業以外の産業が国際的な競争力を有していないという点である。確かに現在、石油産業は莫大な利益を上げているが、未来永劫この状況が続くとは考えられない。今後、石油産業以外の産業を育てていくことが持続的な成長を支えることになる。とはいえ、中東諸国すべてが資源を豊富に採取できるわけではないため、物流業や観光業に力を入れるドバイや金融業に力を入れるバーレーンなど自国で特定の産業を育成している国もある。カタールのような資源豊富な国でさえ、新空港を建設しカタール航空を積極的に売り込むなど、観光業やインフラ整備等へ力を入れていれており、石油産業依存型経済から脱却を図っている。

そして、最後に雇用の問題である。サウジアラビアなどでは若年失業率が 30%を超えているといわれている。人口約 2500 万人、そのうち半数近くが 20 歳未満という国で、である。しかし、この失業の背景は「仕事がないわけではなく、仕事をせずとも政府からの手

厚い補助で裕福に生きていけるから働かない」ということらしい。多くのサウジアラビア人は政府または政府関連の企業に勤め、民間企業に勤めるのは一部に過ぎない。民間企業は給料も低く忙しいからだそうだ。つまり、「生きるために働く必要がそもそもなく、楽な仕事もないのならばわざわざ働かない」というのが若年労働者の意識である。このような中、サウジアラビア政府は、国内民間企業に対し従業員の一定割合は、サウジアラビア人を雇わなければならないというサウダイゼーション（サウジ人化）を推し進めている。しかし、そうやって雇われた人材は戦力外として、会社は給料を出すものの出社を断るケースも多いらしい。優秀な人材が育たず働かない人々を補助金で養う状況は、国力の低下に直結するため非常に由々しき問題であると思われる。

2 つ目に、**Energy Security** である。中東は、エネルギー供給国としての役割が大きいので、そういった観点から課題を挙げていく。まず、石油輸出相手国の多様化である。近年石油からガスへの燃料転換が世界的に進んでいるが、一方で新興国の成長が石油需要を喚起している側面もある。また、安定的な石油生産・供給を行うために継続的な石油上流への投資が必要である。さらに、輸出量を増やすために自国内の化石燃料の消費を抑制する必要もあるだろう。意外なことに、**UAE** やオマーンなどは自国で使用するガス燃料が自国で賄えず、カタールから輸入しなければならないほどである。

最後に喫緊の課題が、人口増加とともに大きく伸びている電力需要への対応である。エネ研の推計では **2035** 年には中東全体での電力需要が **2.5** 倍伸びる見込みである。サウジアラビアで **2.2** 倍、カタールでは約 **4.4** 倍である。実際、出張当日にサウジアラビアに到着したのは **23** 時であったが、街の至る所に電灯が灯っており、贅沢に電気を使っているなど感じた。とはいえ、夏に平均気温が **40** 度を超す厳しい環境のこの国で、冷房などの電力を節約するという行為は無理かもしれない。ある意味、死に直結する気がする。私も度々ホテルから外にでることがあったが、昼間外にいと **5** 分くらいで汗だくであったし、とても疲れやすかった。やはり生活するには過酷な環境だと感じたものである。

3 つ目に **Environment** である。特に電力需要が伸びている中東諸国では、電源構成が大きな懸案事項である。中東諸国では、石油・LNG 火力発電所が大半を占めており、カタールのようにほぼ全てが LNG 火力発電所という国もある。一方、石炭火力はほとんど導入されていない。

最近、中東で原子力発電所や再生可能エネルギーの導入が話題となっている。つい先日も韓国がアブダビの原発案件を落札したという報道があった。さらに、アブダビは『マスターシティ』という CO₂ を全く排出しない都市作りを計画し、太陽光発電と電池の組み合わせで電力供給を実施する予定だという。今後、どれほどの原子力発電所や再生可能エネルギーの導入が可能なのか、まずはアブダビの動向に注目したいと思う。

次に重要な課題が省エネである。現在、中東諸国では電気やガソリンなど様々な資源に

対して補助金が支払われており、国民には市場価格よりも大幅に安価で提供されている。サウジアラビアの電気代などは 2 千 kWh/月まで約 1.2 円である。ただでさえ過酷な生活環境のため多くの電力を使用する傾向にあるというのに、価格まで安いと消費抑制インセンティブが全く働かないのではないかと思われる。実際、近年、電力需要が増加しているため補助金による政府支出も増加し、これが深刻な問題となっている。そこでサウジアラビア政府はようやく 2010 年 6 月、15 年ぶりに家庭用を除く、工業用、商業用の電気料金を平均 9.6%値上げした。今後もサウジアラビアや中東諸国は補助金政策を続けていくのか、どのように増加するエネルギー需要を抑制し省エネを達成していくのか、今後の動向が非常に興味深い。

さて、中東の専門家でもないにも関わらず、「中東の 3E 問題」などといふようなお題目のもと長々と書いてしまった。認識の誤りなどもあるかもしれない。しかし、恥かきついでに、最後に中東に対して日本のとるべき戦略を考えたいと思う。

今後日本は、中東諸国とエネルギーセキュリティ、経済、政治などさまざまな面でパートナーとして親密な関係を築いていかなければならないのは自明である。そこで、私は中東との関係をより緊密にするために、これまで以上に「教育」「文化」というソフト面での貢献が重要であると考えます。

実は、日本の教育は中東では大変評判が良く、特に挨拶などの基本的しつけと掃除当番などの協調性の育成が、欧米にはない教育としてアブダビの皇太子も高く評価をしているそうだ。また、日本の「くもん」は実はオマーン、カタール、バーレーン、UAE にも進出しており、公文式算数教育などが成果をあげているのである。「文化」面でも、日本のアニメや漫画が浸透しており、「ポケモン」など宗教上の理由で放送が許可されなくなったものもあるものの、若者に人気だそうだ。将来、中東の若者と日本の漫画やアニメで盛り上がる、そんなコミュニケーションが成り立つのはこういった共通の文化基盤があればこそであろう。幸いなことに中東の人々は日本人に対して好意的だそうだ。中東の人々との交流と親交が深まれば、これまで以上に様々な分野で我々は強みを発揮できるのではないだろうか。特に、日本の「省エネ技術・政策」、「新エネルギー・環境技術」、そして「原子力」などは世界的にも非常に優位性があり、中東に貢献できる分野でもある。ビジネスも政治も最後は人間同士の約束ごとであるから、より「信頼できる」国が勝ち抜けるのではないだろうか。事はそんなに単純ではないかもしれないが、海外との厳しい競争を勝ち抜くためにはそこまでやっていく必要があると思う。

2022 年の FIFA ワールドカップサッカー大会の主催国はまだ決定されていないが、私はカタールが主催国となり、日本人と中東の人々が仲良く応援している、そんな未来を想像している。そうなるまで 12 年もある、いや、たったの 12 年というべきか。日本がやるべきことは大いにありそうである。

お問合せ : report@tky.ieej.or.jp